不角と妙船

―牙落としの名号縁起をめぐって―

浅野祥子

一、立羽不角

立羽不角は江戸中期の俳人で、寛文二年（一六六二）生まれ、宝暦三年（一七五三）九二歳で没した。本業は本屋であり、俳諧のほかに浮世草子も執筆している。不角の俳諧はよく、俗との批判を受けている。「化鳥風」とも難じられた。しかし、紀行集などで洒脱な味わいをみせるなど、多方面で才能を発揮している。また、「参勤の田舎武士を中心とする特殊な地盤を築き、門人を多く擁してそこに君臨した」[1]とあるように、その周囲に築かれた人脈は多彩であり、その関係を解明することは、不角についての理解を深める上で役に立つものと思われる。本稿では、浄土宗の寺院祐天寺に伝わる「牙落としの名号の縁起」（不角娘妙船著、不角清書）の紹介をし、縁起と、祐天寺所蔵の他の資料から読みとれる、不角の周囲の人間模様についてわかるところを記してみた。

二、牙落としの名号

祐天寺の開山、顕誉祐天上人〔寛永一四年（一六三七）～享保三年（一七一八）〕の書する名号は、上人在世中から、溺死しそうな状態を救ったり、安産をもたらすという利益が喧伝され、万人が求めるものとなっていた。中には、名号の功徳で災難から助かったとして、有名になる名号も出てきた。たとえば「剣難七太刀」の名号や、焼けずの名号、そして今回取り上げる「牙落としの名号」などは有名なものである。[2]この名号の縁起（由緒書）は、祐天寺所蔵の史料数点にも載る。以下、紹介しながら縁起の成立等について考察していき

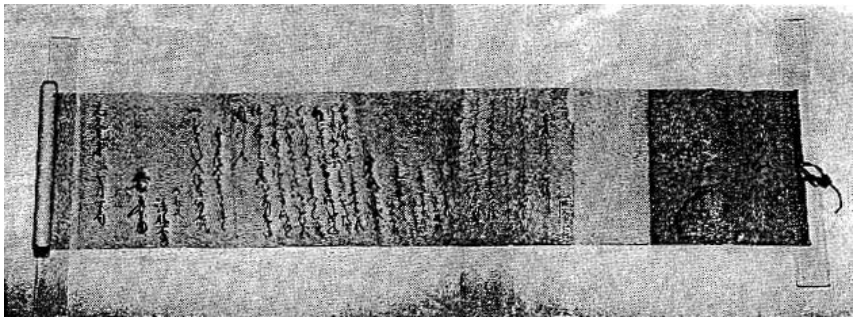
たいと思う。

1、　祐天寺什宝「牙落としの名号縁起」

浄土宗祐天寺の所蔵する「牙落としの名号縁起」がある。表題は『牙落の名號』であるが、名号自体と区別する意味もあり、以下略して『縁起』と呼ぶことにする。これの本文を翻刻紹介しておく。巻子本仕立てであり、見返しに狼に軸を突き付ける人物の絵（金砂子装飾）が描かれている。

牙落の名號

祐天和尚牛嶋に隠遁[3]の御身と
ならせ給ひ草室にゐまそかり
ける時老女来て名号を請て
帰けり其后彼老女再来て三拝して
曰御さいつころ秩父へ詣て[4]侍りしに
つれに離れて行と中をに側成
藪の内より狼出て喰んとする処詮
方なく御名号を抜きて狼に見せて
此名号にても我を喰ふ哉といへは狼
名号を見て頭をうなたれ忽に牙を



落す其時恐しき心なくなりて今は
御名号の力にて□らむと思ひ秩
父の方へ足をむく□狼怒りを止る
而已か剰跡から静に送る此有難
御事命を助かりける御名号の
佛徳とも又狼の落しける牙なと御
目に懸まいらせむと持参仕り候といふ
時に祐天曰□の事も有へき事
偏に弥陀時に御力と思ふへし其名号
并狼の牙は此方へ置へしととゝめ
置給ひ新に名號を書て賜し也
其坐に□妙船か舅松村半兵衛有
合て無理に所望して御名号をも
狼の牙も戴て帰るそれより年
歴て我妙船にあたへ給ふを常より
頂禮し侍る□忠善隠和尚と云
在り或時祐天寺起立祐海上人訪
給ひて物語の序に上人宣ふは予
小僧成し時牙落の名号を師
祐天大僧正江上る老女有り其名号
師の方へ納め置たまふ定て人に再施
給ひたるへし其名號の納る処を
知しらすと干時忠善和尚の曰その
名号は松村親半兵衛より嫁むら
法名妙船に傳けり今に身を離□
上人聞し召われ小僧の間正に見聞する
處の名号也哀拝み申度よし
和尚来り給ひて上人の御願いを具ニ
あかし給ふ我妙船思へらく独此名号を
威徳あらむよりは幾世の人のため
祐天寺の什物に納奉らんしかし
舅半兵衛より傳来の名号を自ら
心ひとつにて納め奉るは憚有兎角
佛意に住すへきと思ひ夜餘の如来の
仏前にて百万遍を執行して後正龍之介
九歳ノ供に鬮をとらす(5)
鬮の次第
祐天寺へ可納也
長く手前に可守也
時節を可俟也

右三の内祐天寺可納闔落けり
夜餘りの如来と申奉るは佛工安阿弥陀仏
誓て昼夜七日に彫刻せんと既七日の
夜東天正に白（アケナン）トス何如誓にして
止シぬ左の御足削残りて拝□させ
たまふ此御佛松村半兵衛安置奉る
祐天上人傳通院より半兵衛前を
御通の節は御駕を立させ給い毎度
拝礼されし如来にておはします
大僧正牛島にゐまそかりける時
半兵衛は御心易召連し人也祐天に
御縁有る仏像故闔をも御仏前に
おゐて取畢
右牙落の名號并狼の牙共に
可ト奉納闔の落ちたる事偏に
佛宣に等けれは長く
祐天寺江奉納
　老女の祐天へ名号指上し時
　紙表具成しを半兵衛改て
紺布金泥牙落御名号

横壱寸二分　長三寸二分
天下和順脇書
紫地金襴　表具
　舅松村半兵衛
　　法名徳峰
　子同名半兵衛
　　法名光舩
　光廼後家むら
　　法名妙舩
　　幸納之處也
右の趣を認し草書を懐
にして妙舩来り我に清書を
願ば予既古来稀成の年
六年以前事也□両眼
さへ□のならひいはむへけれ
とも長く祐天寺に納なは
佛縁にも成なむと
□り侍りぬ
　牙落の名号を準て
一葉落ぬ狼谷の夕嵐

妙舩父
法眼不角
恭書之
（印）　（印）
元文元年辰七月下旬

話の概要は以下の通りである。牛島に隠遁している祐天上人のもとに老女が来て、名号を乞い受けて帰っていった。そののちまたやって来て、次のような話を語った。秩父観音霊場を廻っていると、ある日同行の者達にはぐれて一人で歩いていた。するといきなり藪から狼が出てきて襲ってきた。名号を開いて突き付けると、狼は牙を一枚落として頭を垂れた。命拾いした老女は、秩父から帰ってから牙と名号を持って祐天上人のもとにやって来たのだ。すると、祐天上人はその名号と牙を懇望し、代わりに新しい名号を書き与えた。その場に居合わせた松村半兵衛は二品を上人に懇望して得た。その後半兵衛は二品を息子の嫁である妙舩に与えた。忠善和尚という人が、祐天寺二世祐海上人と話をしているとき、祐海上人が小僧の時見た、この名号のことに話が及んだ。祐海上人が再び拝みたいと言っていることを、忠善和尚は妙舩に伝えた。妙舩は籤を息子に引かせ、その結果に従って名号と牙を祐天寺に納めた。縁起も下書きして、実家の父不角に清書してもらい、共に納めた。

元文元年（一七三六）というと、不角が数え年七十五歳のときのことである。

文中に九歳の息子龍之介の事が出てくる。元文元年（一七三六）に数え年九歳であったとすると、享保十三年（一七二八）生まれである。これは安田吉人氏による系図[6]にある「岾角（宝暦以前、狐角）」という、のちに俳諧師になった人物の可能性がある。安田氏系図には岾角生年の記載はないが、妙舩にほかに男子があったという記述もないので、岾角だと捉えてよいであろう。また、後述する『続近世畸人伝』は、妙舩を不角の妹とする誤記も認められるが、話の骨子自体を信ずるならば、話中に登場する息子も、同じ人物だと思われる。

見返しの絵の作者は不明だが、『俳家大系図』[7]には「書画ヲ善ス」とあり、不角の画とも考えられる。穎原退蔵氏[8]も不角は「書画等をもよくしたらしい」とされる。

2、『祐天大僧正利益記』

文化五年(一八〇八)刊行のこの書は、祐天上人の事績を、深く帰依していた織田丹後侯の家臣、寺田市右衛門という者が書き留めて置いたものを、祐天寺二世祐海上人が写し置き、それに祐天寺六世祐全上人が加筆して成立したもの[9]で、上中下三巻から成る。祐天上人の周りで起きた奇瑞が多数記録されている。

上巻に納められる「名號威力の事」という話が、『縁起』と同じ話を取り上げている。

一元禄の初の事なりしが。江戸の老女何何某。師の徊室に来りて教を受。名号を拝受して帰りし後。都下の男女数人をかたらひ。秩父観世音の霊場を巡礼せしに。一日かの老女同行におくれて。唯ひとりたどり行處に。道の邊の藪の中より。狼走り出。追ひ来りてくらひつかんとす。老女恐ろしさいふ斗なく。高聲に念佛を唱へ。忽りかけにせし師の名号を取り出し。狼の鼻先にかざしければ。さしも猛き獣も名号の威力にや感じけん。忽ち頭をたれて。大地にひれふし。壱枚の牙を落しぬ。夫よりは怖畏の心なく成て。其牙を拾ひ。念仏しながら歩みゆけば。狼も静に後をしたひて送りけるとぞ。老女不思議に危き難をのがれて。身を全ふせしは。偏に念仏の利益。師の徳行のいたす所也とありがたくて。牛嶋の庵室に来り。始末を具に申のべ。狼の牙をも師の高覧に備へけるに。江戸中橋。松村半兵衛といふ者。其坐に在て。老女の物語を聞。頻りに懇望して。其名号と狼の牙をゆずられて。年久しく護持せしが。後に倅半兵衛が妻後に出家して妙舩といふにあたへける。此妙廼は俳諧の宗匠法眼不角が女なり。然るに祐海和尚、其名号を敬慕して。拝見せばやと聞えければ。妙廼ひそかにおもふやう。かゝる霊験の名号。わらはが所持せんより。祐天寺に納め置ば。多くの日との結縁となるべし。されど舅の譲りを受し宝物を。我ままには斗ひがたしとて。本尊前にて。御籤を取て。佛勅に任せて。右の二種を。祐天寺に納めて。什宝とせり。其時妙舩縁起を下書して。父不角に清書を頼み。是を添て納めけり。縁起のおくに不角が発句あり

ひと葉落ぬ狼谷の夕嵐

狼に出逢った時の展開は、『縁起』とほぼ一緒である。違うところは、

A　『縁起』では、「老女の話を聞いた祐天上人が名号と狼の牙を望み、老女より受け取った。その代わりに新しい名号

を書いて老女に与えた。それを更に、その場にいた松村半兵衛が懇望して、名号と狼の牙をいただいた」という経緯を辿るが、『利益記』では、祐天上人が老女から二品を請い受けた過程が省略されている。おそらく、多くの話を集成して載せている『利益記』としては話を簡略化したかったため、過程を省略したのではないかと思われる。

B　妙船が籤を引いたのは、『利益記』では「本尊」となっているが、これは『縁起』により、妙船の護持する本尊で、「夜餘りの弥陀」の前であることがわかる。なお、「夜餘りの弥陀」については『縁起』文中に説明があるが、この阿弥陀像ものちに祐天寺に納められて[10]、その縁起も不角が書いている[11]。

細部に以上のような差異、詳しさの違いはあるが、発句まで一致することを考えると、『利益記』筆者は「牙落としの名号縁起」をよく知った上で本文を書いていると思われる。『利益記』の序には、祐海が校閲したと記されているが、そうであるならばいかにもと納得できることである。

3、『目黒祐天寺宝物記』

成立年代はわからないが、祐天寺宝物を記した書である。この中に「狼牙落名號」と、そのいわれが書かれている。

祐天大僧正筆

一狼牙落名號

右名号ハ或老女秩父巡礼の節道供におくれ独り山路にたとりし時偏なる藪の中より狼出て恐敷口を開き老女を喰んとす老女も詮方なく必至と覚悟し兼て所持せし祐天の名号を懐中より取出し狼にむかい一心に念しけれはさしもたけき狼の名号を見て忽ちに頭をたれ牙を落しぬ夫より怖しき心なくなり道を行に狼怒りを止るのみかなれ〳〵しく静に跡を送りしかかろふして命助り帰りて件の趣を祐天に拝謝しけれ共これ全く名号の利益と何時か信心力の感應する處なり□て我力にあらす斯る現益を蒙る迄弥菩提を増進すへしと教示し給ふ其後松村半兵衛後家妙船に傳ひ其父法眼不角に記縁を書しぬ当寺江奉納有奥に不角の句有り

一葉落ぬ狼谷の夕嵐

右三品は文化十三年子六月中大奥江奉差上候儀も有之

『縁起』及び『利益記』と、記述で変わったところは無い。最後に加えられている内容は、狼の牙、名号、縁起の三点を文化十三年（一八一六）に大奥へお持ちしてお見せしたということであろう。

三、　不角娘、妙船

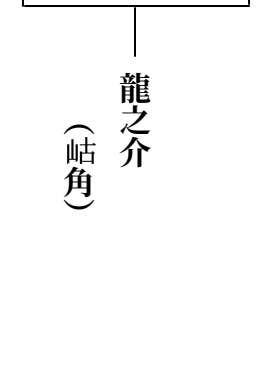
『続近世畸人伝』によると、妙船はたいへん仏道に深く帰依した人であったらしい。妙船が夕方に経文を読んでいると、頭上に光明が輝き、また背後より光が差すということが幾度もあった。それは信仰心が篤い故だという評判が立ったが妙船は、罪深い我が身にそのような奇瑞が現れるわけがない、魔物の仕業であろうと、深く悲しみました。ある夕暮れ、仏間の二階で不審な音がするので息子に確かめさせたところ、古狐が逃げ去っていった。これを聞いて妙船は、やはりそうでしたかと、ますます信仰心を固めたということである。

俗受けをする俳諧に終始した不角に較べ、妙船は真摯に仏道に心を御寄せていたと思われる逸話である。妙船の法号が祐天寺の過去帳に載っているので、ここに揚げておく。

宝暦三年（一七五三）七月七日を命日として、「松誉孤残妙船信女」。特記事項（寄進）として「夜餘本尊」。施主は「松村半兵エ」。父不角を見送ってわずか1ケ月のちに逝去したのである。

特記事項、施主を同じくする法号がもう一つある。享保十八年（一七三三）九月十八日を命日とする、「眞誉峯月光船信士」である。『縁起』奥書に、「光船後家むら　法名妙船」と書いてあるのを考えると、これが妙船の夫の法号と思われる。安田氏制作の系図に、妙船が「元文以降、妙船」（元文元年は一七三六年）とある事を考えると、妙船は夫の没後出家し、法号を受けたものと思われる。

以下に、検証した資料によってわかる範囲でこの家の系図をまとめておく。これは今回調査した資料に限ってまとめたものであり、安田氏制作の系図によると、妙船にはほかに娘も二人いたようなので、付記しておく。



四、　不角の後援者、池田綱政

権力に進んで近づいた不角の門人には大名もいたという。備前岡山藩主、池田綱政は、その中でも代表格である。夜原氏は前掲論文で、元禄十六年（一七〇三）成立の『蠅袋』を紹介して、不角が門人である池田侯（俳名備角）の供をして京都に行ったとき、途中備角の旅舎での、

短夜ぞ不角行て寐（ね）い明逢（あす）はう　　備角
蚊も歯のたゝぬかしこまり胝　　不角

という応酬をあげて、「幇間的な卑屈な態度」と評される。しかし、不角の門人は千人にあまり、「千翁」と自称したという。

この池田綱政は、実は「牙落としの名号縁起」を蔵する祐天寺とは深い縁を持つ人物であった。

五、　綱政と祐天寺

池田綱政（一六三八～一七一四）は、池田光政の長男として生まれた。賢君として名高い父とは異なり、「性格我儘で学問・政事を好まず、かぶき者を近づけ女色を好んだ」という。しかし、「能楽・和歌・絵画・蹴鞠など」「やさしき道」を好む「公家的文化大名」だったという[12]。また、佛教も信奉したという。綱政の我が儘には、母は本多忠刻と千姫の間に生まれた勝子で、家康の血を引く家柄であるという慢心もあったかもしれない。

綱政の子は七〇人を数えたが、その中の三人の女子が特に祐天上人への篤い信仰を持ち、或いは嫁ぎ先で信者を増やしているのである。

綱政の俳諧の師、不角が祐天寺と関わりがあったということも、（妙船にとっては純粋な信仰の証であっても、）或いは、不角の脳裏には、後援者の縁の方達が信仰している寺院だという意識が働いたのかもしれない。

以下、時代が降る人物も含まれるが、この系統のうち、祐天寺と関わる人物をあげていってみよう。

（ア）山内家との関係

「松平（山内）土佐守豊房が室」（『寛政重修諸家譜』）と記された女子は、祐天寺過去帳[13]には「玉仙院殿天蓮社法誉至心香曜大法尼」と法号が記される（俗名菊子）。玉仙院は、延享元年（一七四四）に祐天寺に勤行用の釣り鐘（差し渡し二尺五寸）を寄進するなど[14]、大きな寄与をした人物である。

祐天寺墓地に墓がある。[15]

また、十二代豊資正室豊子（「祐仙院殿雲峰霊彩大姉」）は、池田斉政長女であり、祐天寺に葬られる。

（イ）立花家との関係

「立花飛騨守鑑任が室」（『寛政重修諸家譜』）と記された女子は、祐天寺過去帳には「馨香院殿蓮誉宝池□映大姉」と法号が記される。筑前柳川の城主、立花鑑任（霊明院）に嫁いだ。鑑任の息、貞俶が家督を継いだが、その娘（母は白井氏）が毛利重就（ウ参照）の正室となった。これが「瑞泰院殿祐蓮社高誉豊安壽映大禅定尼」〔明和六年四月寂（一七六九）〕であり、のちに祐天寺に常念仏堂一宇を建立した人物[16]で、祐天寺境内に顕彰碑が建っている。

（ウ）毛利家との関係

「松平（毛利）長門守吉元が室」（『寛政重修諸家譜』）と記された女子は、祐天寺過去帳には「養心院殿浄室貞観大禅尼」と法号が記される。この夫、吉元から数えて三代目の当主が重就であり、（イ）で出た瑞泰院の夫である。瑞泰院は毛利家に信仰を広め、一族は元より、毛利家奥女中の中にも祐天寺過去帳に法号のみえる者は多い。

さらに、瑞泰院の娘のうち一人は、山内豊雍の室となり（観月院殿翠顔妙薫大姉）、再び（ア）の山内家に祐天信仰が興隆する糸口となった（祐天寺にこの人物の像牌を蔵していた）。豊母と観月院の間の娘、随岸院殿恵光智天大童女（岩姫）の墓も、祐天寺にあった。瑞泰院のもう一人の娘は、有馬頼貴に嫁した。養源院と号するこの夫人の顕彰碑は、母の随泰院の碑と並んで現在も祐天寺境内に建っている。有馬家にも、この養源院を中心として祐天信仰はあったのである。

祐天上人は増上寺三十六世として六代将軍家宣公の葬儀の導師も勤め、庶民からも広く信仰されていた。また、大名家もこぞって帰依した。それは、弟子の祐海上人が祐天寺を起立してからも（時期によって多少の差はあっても）継続していたのである。その中でもこの人々は、親戚は姻戚関係によって信仰を伝え合っていった典型的な例と言えるだろう。

（ア）～（ウ）の中には時代が降る人物も含まれているが、（ア）の玉仙院は宝暦八年（一七五八）没であり、不角と同じ時代を生きている。（イ）の瑞泰院も没年は不角より十六年降るだけである。

不角が祐天寺へ納める縁起を書いたのは取り立てて祐天寺へ信仰を抱いていたというわけからではなく、娘妙船の頼みによるものだが、有力な弟子、池田侯の子女が信仰している寺院だという意識は、働いたかもしれない。池田侯と不角との関係が初めて資料に表れるのは元禄八年（一六九五）不角編の『俳諧水車』である。[17] 旅に供したこともあり、親交の深い池田侯の周辺のことならば、不角はよく知っていたと思われるのである。

しかし、不角自身念仏びいきだったと思われるふしもある。『笠の蠅』[18] には、好角の仏教の論理を詠んだ句について、「扨もしさいなる事を云好角哉達磨の九年面壁も固案すれは念仏の足代なりと予か念仏贔屓して行」というくだりがある。会話上の修辞かもしれないが、少なくとも念仏嫌いではなかったといえよう。

以上、不角と妙船、池田侯について目に付いた資料から、いささか関係をまとめてみたものである。今回は祐天寺に関わる資料を中心とした調査に留まった。調査不足をお許しいただき、先学の御教示を乞う次第である。

また、史料の翻刻にあたって大正大学教授小此木輝之先生、加治由行氏に多くのご教示をいただきました。厚く御礼申し上げます。

（祐天寺研究員）

注

（1）鈴木勝忠『日本古典文学大辞典』

（2）『江戸名所図会』「祐天寺」の項には、「開山大僧正書写六字名號　奇特尤多、就中剣難七太刀身代名號、狼牙落名號、火中出現不焼名號、疱瘡守名號等の現益は普く世にしる所也」とある。

（3）祐天上人は貞享三年（一六八六）に増上寺を隠遁し、元禄十二年（一六九九）に大巌寺住職になるまで、牛島、石原に草庵を営み、暮らしていた。

（4）秩父札所巡りは、江戸時代成立という説もあったが、長享二年（一四八八）の秩父札所番付が発見され、その頃には始まっていたとされている（矢島浩『秩父観音霊場研究序説』豊昭学園、一九六六年）

（5）子供は無心なので、籤を引くと神仏の意志を伝えやすいと思ったのであろうか。

（6）「立羽不角年譜考」『調布学園女子短期大学紀要』30号、平成十年三月二十日

（7）生川春明編、天保九年（一八三八）刊（『近世人名録集成』森銑三ほか編、勉誠社、昭和五一年所収）

（8）「享保俳諧の三中心」（『穎原退蔵著作集』四巻三六一頁）

（9）序文による。

（10）寛延元年（一七四八）奉納（『祐天寺寺録撮要』二）

（11）夜余りの弥陀は祐天寺に奉納されて後経堂の本尊とされていたが、明治二十七年（一八九四）の火災の折に経堂と共に羅災。不角筆の縁起のことは、『祐天寺寺録撮要』二に記される。

（12）『三百藩藩主人名事典』藩主人名事典編纂委員会、新人物往来社、一九八六年

（13）『本堂過去霊名簿』（祐天寺蔵）

（14）『祐天寺寺録撮要』（祐天寺蔵）による。

（15）『江戸大名墓総覧』秋元茂陽、金融界社、平成十年にも掲載。

（16）明和六年（一七六九）八月二十八日上棟。瑞泰院の没後、その遺志により追福のため建立された。『祐天寺寺録撮要』二（祐天寺蔵）

（17）安田吉人「立羽不角年譜考」二、『調布日本文化』十号、平成十二年三月

（18）元禄十四年（一七〇一）五月、岡山に発つ備角の見送りを兼ねて、俳友好柳・好角と江ノ島・鎌倉・金沢方面に行ったときの紀行。『関東俳諧叢書』十一巻（加藤定彦、外村展子編、関東俳諧叢書刊行会、一九九五年）所収

参考資料は敬称を略させていただいた